

会報 わだち

わだちの会

〒274-8501 船橋市習志野台7-24-1
日本大学理工学部交通システム工学科
ホームページ：http://wadachinokai.org
メールアドレス：wadachi@wadachinokai.org

発行責任者 植田 和彦 (11期)
(わだちの会 会長)
編集委員長 小山 茂 (23期)
編集委員 渡邊 貞之 (20期)
齊藤 準平 (33期)
小林 康之 (48期)

Vol. 32 (平成28年3月末日発行)

巻頭言

『 技術屋として求められること 』

一場 駿 (12期)

わだちの会、創立50周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。記念すべき会報「わだち」、巻頭言の執筆の推薦を頂き厚く御礼を申し上げます。

さて、私は30年ほど前、設計会社を立ち上げ、長く下水道の設計に携わってきた。平成27年春、黄綬褒章授与という栄誉を賜る機会を得た。この栄誉は地震による下水道の被害を減らそうと、液状化によるマンホール浮上を防止する新たな工法として、ハットリング工法を考案、開発、改良を進めてきたことに対する褒章で、文部科学省よりの御推薦である。

私も最初そうだったのだが、「どこぞの、誰それが黄綬褒章を授与された」と聞いてもあまりピンと来なかった。何だかスゴそうだと思いつつも「...それで、褒章って何ですか？」という情けない状態であった。そもそも褒章とは、天皇陛下が、社会や文化、芸能、科学技術、スポーツ等、特定の分野の事績に対して貢献したものを表章する『栄典』のひとつである。その中で黄綬褒章は「その道一筋に業務に精励し衆民の規範となる者」を対象とするという。私が衆民の規範たり得るかどうかは目を瞑るとして、要するにその道一筋で頑張ってきた人を褒めようということである。そういう意味でいえば土木一筋、とにかく一生懸命やってきたのは確かである。本学で土木の世界の扉を開き、勤めた会社を飛び出し自ら会社を立ち上げ、埼玉県内のコンサルタントでトップを窺えるところまでできた。

いついかなる時もそこにある流れにただ身を任せるのではなく、自らの手で船を漕いできたつもりである。しかしながら、こうなって周りを見渡してみると、自分の手に握るオールは誰が手渡してくれたものなのか、船のメンテナンスは誰が行ってくれているのか、また、進むべき方向に対していつも厳しくまたは優しいアドバイスをくれる方々もたくさんいたのではないかと。そして、大海原の航海はただ厳しいだけでなく、多くの仲間とワイワイ楽しく過ごす旅でもあったのだと思ひ起こされるのである。

特に本学の仲間の繋がりは何と、広く複雑に張り巡らされていることか。そもそもマンホール浮上防止工法を開発するきっかけとなった発注者が、実は、公については厳しく、私についてはダイナミックでありかつ優しさがある学科の先輩である。このように公私にわたる付き合いができるのが同窓である。

12期はオイルショック後の就職難(昭和51年3月)の卒業である。入学時は大手からの募集が多くあったが、卒業時には、名前を聞いたことのある会社は、ほとんどなく、多くの卒業生は、初めて大卒を採用するような地元の土建屋に就職をせざるを得なかった。しかし今となってみると、その中で社長、副社長、専務と、会社の中心で活躍している仲間が多いように思える。皆、おそらく社内で教えてもらえた訳でもなく、自力でそれぞれのチャンネルを総動員して勉強してきたのだろう。そのチャンネルの中で、私にとって大きかったのは、改めて広く複雑に張り巡らされている本学の仲間の繋がりであった。その先の繋がりに、またその先と、公私ともに輪を広げていったように思える。

私の信念として「技術とは、理論理屈だけで通るものではない」と常日頃、社の内外で話をしている。かねてよりコミュニケーションの重要性が叫ばれているが、特に技術者は人付き合いを不得手とし理論理屈に逃げがちな者が多い。実際のところ、「土木一筋。技術で褒章を戴いた」といいながらも、実は自分ひとりだけで得た栄誉なのだとは思っていない。個人の実力だけで言えば、私より上の者などいくらでもいるのだろうと思う。しかしながら、これまで土木設計の仕事をしてきた中で「我々には技術的にかなわないな」と感じる局面はほとんど無かった。それは常に「自分にできなくても誰かにできる」ことであった。共に取り組む誰か、さらにそこからつながる先々の誰かも含めて『我々』なのだ、いつも誰かの存在を感じながら、そして感謝しながら今があるのである。

確かに技術者にとっては、理論理屈は重要なベースであるが、それを彩るのはいつも人情・感情である事を、未来を作る若者に伝えたい。